7月6日（月）サムエル記第二１９章３１～４０節
「このバルジライは、たいへん年をとっていて八十歳であった。彼は王がマハナイムにいる間、王を養っていた。非常に裕福な人だったからである。」（３２節）

ギルアデ人バルジライが、ロゲリムから下って来て、王を見送るために、王とともにヨルダン川まで進んで来ました。バルジライは１７章２７節に出てまいりますが、マハナイムに来たダビデと彼とともにいた民に食糧を与えましたが、１９章３２節に「彼は王がマハナイムにいる間、王を養っていた」とありますので、ダビデがマハナイムにいる間、ずっとダビデと彼の民の生活を支えてきたのでしょう。この時ダビデはアブサロムから逃げていた状態でした。もしダビデがアブサロムに敗北するようなことになれば、身に危険が及ぶということになりかねませんでしたし、家の者たちにまで危険が及ぶことを覚悟しなければなりませんでした。しかしバルジライは、政治的なかけ引きを一切することなく、またダビデの置かれた状況とは関係なく、自ら王になることを宣言したアブサロムよりも、神が油注がれたダビデの側につき、彼を真の愛をもってもてなしました。バルジライのもてなしは、息子アブサロムに追われ、失意と悲しみの中にいたダビデをどれほど慰めたことでしょうか。私たちの愛の交わりが、つらい状況に置かれている兄弟姉妹の慰めと励ましになるように祈ってまいりたいと思わされますし、何かできることがあれば持てるものをもって積極的にさせていただく者となりましょう。

ダビデは、今度は自分がバルジライを養う番だと思ったかもしれませんし、バルジライが自分にしてくれたことにぜひとも報いたいと思ったのかもしれません。それでダビデはバルジライに一緒にエルサレムへ行くよう提案します。しかし高齢を理由にバルジライはその申し出を断り、自分の町で人生の最後を迎えたいと言います。その一方でキムハムを連れて行ってほしいと頼みます。「私は、あなたが良いと思うことを彼にしよう」と言い、キムハムを通してバルジライのしたことに報いることを約束しました。このようにしてダビデは、決して与えられた恵みを忘れず、真実を尽くそうとしたのです。私たちも、さまざまな困難な時やどうしていいのか分からない時に主から多くの恵みをいただき、主によって自分の歩みがどれだけ助けられたことでしょうか。私たちは、そのことをおぼえて主に心から感謝をし、恵みを忘れず、なしうる限りをもって主に真実を尽くしたいと思わされます。

7月7日（火）サムエル記第二１９章４１～４３節
「しかし、ユダの人々のことばは、イスラエルの人々のことばより激しかった。」（４３節）

４１節で「イスラエルのすべての人」すなわちイスラエル北部の部族の人々の不満が爆発します。ダビデの手前もあったからでしょうか、彼らはユダの民を「われわれの同胞」と呼びつつも「なぜ、あなたを奪い去り、王とその家族に、また王とともにいる部下たちに、ヨルダン川を渡らせたのですか」と言います。実際には、祭司ツァドクとエブヤタルを遣わして、ダビデ主導

で行われたことなのですが、彼らはそのことを知らなかったのか、ユダの人々のせいにしています。４２節でユダのすべての人々は、「王は、われわれの身内だからだ」と、ユダの部族とダビデとの関係の近さをアピールします。また、自分たちが王のためにしたことに対して王からは何も報いはもらってないとも言います。今度は、イスラエルの人々がユダの人々に答えて「われわれは、王のうちに十の分を持っている」と言います。恐らくこれは、ユダよりもより強い勢力であることを強調していると思われますが、その後「だからダビデにも、あなたがたよりも多くを持っている」と言います。「なぜ、われわれをないがしろにするのか。われわれの王を連れ戻そうと最初に言い出したのは、われわれではないか」とは、１９章９，１０節のことを指していると思われます。このようにして、ユダとイスラエルの間で論争が起こりました。恐らくユダとイスラエルの双方の思惑は、政治的影響力を持ち続け、政局において主導権を握り続けるということだったのだろうと思われます。しかし、彼らがなすべきことは、国として一つになることであり、ダビデもそのことを願ってユダの長老のもとにツァドクとエビヤタルを遣わしたのです。

私たちも、教会の中で論争になることがあります。教会の中で論争してはいけないとか、自分の考えを主張してはいけないと言っているのではありません。むしろ、発言している動機が問われるのです。私たちが発言する時には、必ず教会の徳を高めるためになされるべきです。私たちの口にする言葉は、周りの徳を高めているでしょうか。それと同時に、私たちの念願することは、教会が一つになることです。これは、聖霊の働きによってなされることです。聖霊が私たちを常に一つとされますように祈りましょう。

７月８日（水）サムエル記第二２０章１～３節

「すべてのイスラエルの人々は、ダビデから離れ、ビクリの子シェバに従って行った。しかし、ユダの人々はヨルダン川からエルサレムまで、自分たちの王につき従って行った。」（２節）

１９章４１～４３節にイスラエルとユダの言い争いが記されていますが、「たまたまそこに、よこしまな者で、名をシェバという者がいました。彼は、イスラエルの民の不満をうまく利用しようと企み、1節で「ダビデのうちには、われわれのための割り当て地はない。」「エッサイの子のうちには、われわれのためのゆずりの地はない。」と言い、仮にイスラエルの人々がダビデに従ったとしても、土地をあてがってもらうことは期待できないと思わせようとしたのです。結局、ダビデは身内であるユダの人々を優遇することで、イスラエルの人々をないがしろにするに違いないと思わせようとしたということです。ですから、ダビデに従わず、「イスラエルよ、それぞれ自分の天幕に帰れ」と呼びかけます。その結果「すべてのイスラエルの人々は、ダビデから離れ、ビクリの子シェバに従い」その一方で「ユダの人々はヨルダン川からエルサレムまで、自分たちの王につき従って行き」ました。このようにして、イスラエルとユダが完全に分かれてしまったのです。

昨日も書きましたが、教会の中の問題は早く解決しなければ、一致を破壊する原因になりかねません。特に、私たちの敵であるサタンは、うまくそのような教会の中の問題を利用して教会を分裂させようと狙っていて、特に悔い改めない人々を巧みに利用しようとします。私たちは、サタンに利用され、サタンを喜ばせるものではなく、常に主を喜ばせ、聖霊の一致を保ち続ける群れでありたいものです。

７月９日（木）サムエル記第二２０章４～１０節
「アマサはヨアブの手にある剣に気をつけていなかった。ヨアブは彼の下腹を突いた。それで、はらわたが地面に流れ出た。この一突きでアマサは死んだ。ヨアブとその兄弟アビシャイは、ビクリの子シェバの後を追った。」（１０節）

ダビデはアマサを軍の長に任命しましたが（１９章１３節）そのアマサに、ユダの人々を三日のうちに召集し、あなたも、ここに帰って来なさいと命じます。（４節）しかし、アマサに人望がなかったのか、このような働きが苦手だったのか、理由は分かりませんが、期限までに人々を召集することができませんでした。しかしダビデは、とてもアマサを待てないと思ったのでしょう。それはシェバが自分たちにアブサロムよりももっとひどいわざわいを、仕掛けるに違いないと警戒して、城壁のある町に逃れる前に彼を討ち取りたかったからです。そのためにダビデはアビシャイを遣わしました。

アマサは、期限までに務めを果たすことができなかったので、ダビデのもとに帰ることはできないと思ったのでしょう。アビシャイが率いるダビデの家来たちがギブオンまで来ると、彼は彼らの前にやって来ました。そのアマサにヨアブは「兄弟、おまえは無事か」と親しげに近づき、口づけしようと右手で彼のひげをつかみ、もう一方の手で、剣をもってはらわたが地面に流れるほど、彼の下腹を突き刺しました。この一突きでアマサは死にました。アブサロムの軍の長であったにもかかわらず、これまでダビデに忠実に仕えてきた自分に取って代わるかたちで、アマサが軍の長になったことにヨアブはとても我慢ならなかったのでしょう。それはアマサを殺したいと思うような個人的な恨みになるほど大きくなっていったということです。

私たちも、クリスチャンであっても人間関係に悩まされることはあるでしょう。ヨアブのように殺したいとまでは思わなくても、その人を見ると心の中におもしろくない思いが出て来るということがあるかもしれません。ですから、私たちは心の中に秘めている悪しき思いが大きくなってさらなる罪となる前に、真実な悔い改めをもって、そのような罪を解決していただくべきです。主が今日お示しになった、心の中にある秘めた悪しき思いはありませんか。

７月１０日（金）サムエル記第二２０章１１～１３節
「ヨアブにつく者、ダビデに味方する者は、ヨアブに従え。」（１１節）

アマサが殺された後、１２節でヨアブに仕える若者の一人が殺されたアマサのそばに立ち、「ヨアブにつく者、ダビデに味方する者は、ヨアブに従え」と言います。ヨアブに代わって軍の長になったアマサが殺されたので、今度はヨアブが全権の指揮を執ることになったので、彼に従えということなのでしょう。恐らくアビシャイの後に続いて、シェバの追撃に向かったダビデの兵たちは、軍の長アマサの亡骸を見て仰天して立ち止まったに違いありません。ですから、大路から野原へ運び、彼の遺体には見えないように衣を掛けました。そして、ダビデの兵士たちはヨアブの後について進み、シェバを追いました。

ヨアブは、ダビデが知らないうちに軍を掌握してしまいました。以前にも記しましたが、アブサロムの軍の長を務めていたアマサを軍の長にしたのは、アマサを赦し、イスラエルとユダを一つにしたいとのダビデの願いがありました。しかし、アマサを殺害し、勝手に軍を自分の手中に収めてしまったヨアブには、そのようなダビデの思いは理解できなかったことでしょう。私たちも主の御思いやみこころを完全に理解することはできません。しかし、主がなされることはすべて愛を動機としたものであり、最後にはすべて最善に導かれることは信じているはずです。それであれば、私たちは主のみこころを損ねることなく、主のみこころに従い、自分を通して主の栄光が現れ、主のみわざがなされることを願うべきです。それは主が何よりも私たちに願っていることでもあります。

7月11日（土）サムエル記第二20章14～22節

「そうではない。実はピクリの息子で、その名をシェバというエフライムの山地の出である男が、ダビデ王に手向かったのだ。この男だけを引き渡してくれたら、私はこの町から引き揚げよう。」（21節）

シェバはイスラエルの全部族を通り、アベル・ベテ・マアカ（現在のテル・アビブ）に行きました。そして、シェバ自身の部族であるすべてのビクリ人が彼に従いました。ダビデ軍はイスラエルの最北の地までシェバを追わなければならなくなり、６節でダビデが心配したとおり、城壁のある町に逃げ込んでしまいました。ヨアブの軍隊は、シェバを包囲し、この町に向かって塁を築き、城壁を破壊して倒そうとしていました。

すると予期せぬことが起こります。一人の知恵ある女がヨアブに呼びかけました。するとヨアブが、その呼びかけに応答すると、彼女は自分のことばを聞くように要求し、ヨアブが「よし、聞こう。」と応じると、この女は話し始めます。彼女は、ヨアブに対して二つの罪で訴えます。まず一つが、「あなたは、イスラエルの母である町を滅ぼそうとしておられます。」と言います。そして二つ目が主のゆずりの地を呑み尽くそうとしているということです。それに対してヨアブは、「とんでもない。呑み尽くしたり滅ぼしたりするなど、とんでもないことだ」と真っ向から反論し、ダビデ王に手向かったシェバという男を引き渡せば、自分たちは引き揚げると言います。この女は城壁の中にいた人たちをうまく説得したようで、ピクリの子シェバの首を

はねて、それをヨアブのもとに投げ、こうして戦いは終わりました。もしこのまま戦いが継続していたなら、どれだけの大きな被害が出ていたか分かりません。それこそ町が滅びるようなことになりかねないところでしたが、一人の女が、よこしまな者シェバによって引き起こされた危機から人々を救いました。私たちも、日々の歩みの中で時には難しい状況に置かれることがあるかもしれません。そのような時にも、主から知恵をいただき、危機を脱して平和に物事を収めることができる信仰者とさせていただきたいと思わされます。

７月１２日（日）サムエル記第二２０章２３～２６節
「さて、ヨアブはイスラエルの全軍の長であった。」（２３節）

ここでヨアブはイスラエルの全軍の長となっています。１９章１３節にありますように、本来であればアマサが軍の長になるはずでしたが、彼がヨアブによって殺害され、またヨアブはシェバ討伐に貢献しましたので、論功行賞的なものもあったのかもしれません。いずれにしても、ダビデの中でヨアブを再び全軍の長にすることについては葛藤があったのではないかと思われます。列王記第一２章５，６節においてダビデは遺言として、「また、あなたはツェルヤの子ヨアブが私にしたこと、すなわち、彼がイスラエルの二人の軍の長、ネルの子アブネルとエテルの子アマサにしたことを知っている。ヨアブは彼らを虐殺し、平和なときに戦いの血を流し、自分の腰の帯と足のくつに戦いの血をつけたのだ。だから、あなたは自分の知恵にしたがって行動しなさい。彼の白髪頭を安らかによみに下らせてはならない。」と息子ソロモンにヨアブのことを託しているとおりです。しかし本来であればヨアブのことについてはダビデ自身が対応しなければならなかったのです。実際に、列王記第一１章７節で「彼がツェルヤの子ヨアブと祭司エブヤタルに相談したので、彼らはアドニヤを支持することになった」とありますように、ヨアブはソロモンではなく、王になるとの野心を燃やしたアドニヤを支持するようなことをしました。

私たちも何となく言いづらいことをそのままにしてしまったり、もしかすると他の人が何とかしてくれのではないかと、他の人をあてにしてしまうことがあるかもしれません。しかし、それは主の御前に誠実な態度とは言えません。自分が言うべきことは祈りから来る確信をもって自分の口で言い、自分がしなければならないことは、決して他の人をあてにするのではなく、自分でしなければなりません。主の前に不誠実に放っておかれることがあれば、それは個人においても、教会においても、アドニヤを支持したヨアブのように問題を引き起こすもととなってしまいます。そのような禍根を決して残さないように私たちは努めなければなりません。